社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」

―私益と公益の矛盾なき一致―

進化する にっぽんぶらんど 日本力

小松電機産業

小松　昭夫社長に聞く

小松電機産業は神さまの国、出雲で生まれたベンチャー企業。率いる小松昭夫社長もまた、世間一般の起業家という枠にはまらない人。企業経営者というより、哲学・思想家といった方が適切かも知れない。その強烈な個性から生まれる語録は難解だが、どこか新鮮。「競争と共生の両立」「企業から事業へ」「長期的・多面的・根源的」「中庸の生き方」「酸化から還元そして覚醒・蘇生循環環脳へ」―など。次々と飛び出す。それでも発するメッセージは不変。常に視点はアルキメデスの多面体に挑戦するように無限の球に近い。一方で〝社長業〟は「今年創業30年だが、この間一度も赤字をだしたことはない。無借金経営、金もうけもうまい」と笑い飛ばす。これからは「環境・健康・平和」「災い転じて福となす」をキーワードに、中海・宍道湖圏が北東アジアで大きな役割を担う時代が来た、と説く小松社長を訪ねた。

（聞き手　正伝盛豪・広島総局長）

高速開閉シートシャッター

防塵・防虫性で新市場創出

―小松経営の本質は市場創造によって本来あるべき社会へ変革を促すということです。この思想は中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞など、さまざまな表彰につながっています。

小松　人間・自然・科学の三方から場を整える21世紀の帝王学（木鶏学）、本来あるべき姿に誘導する宰相学（リーダー学…矛盾すると思われることの両立）の気運を高め、時流、地の利を学び、順序を踏んでタイミングを計る中から天の時を会得、和の生まれる瞬間をつくる。これから「どうなるか」ではなく「何のために何を目指し、いつ何をどうするか」が命。この「するか」が市場・社会を動かす。結果として、偏狭の地、島根県八束郡八雲村でのシートシャッター『門番』の誕生と発展の軌跡は還暦以降、激動の時代にあって、これから必要とされる役割を担うための、頭脳と立場を創る過程であったと認識している。

高速で開閉するビニール製シートシャッター『門番』は、もともと山陰の厳しい気候風土から労働環境を守ろうと製品化したものだが、最近はさらに新しい市場を生み出している。高い防塵・防虫性が注目され、食品、印刷、薬品業界はもとよりあらゆる業界からの新規需要も多い。光の波長で昆虫を制御するオプトロン技術を使った新シリーズも順調に伸びている。国内での累計販売台数は9万台を超え業界トップの座を維持。超密閉技術や自動復帰機能など、長年の研究開発で実用化したノウハウを含め、無償技術供与した韓国をはじめ、中国にも普及が始まっている。

上下水道制御・管理システム

ネット活用で全国展開へ

―もう一つの主力商品である『やくも水神』も、キーワードである環境と市場創造製品なのでしょうか。

小松　21世紀は水の世紀といわれる中で、日本人の生存基盤である食料自給率35％、エネルギー100％輸入という現実がある。その上、紛争の続いている朝鮮半島の対岸、人類の歴史上初めて原爆を投下された広島に中国山地を挟んで位置するこの地域は宍道湖・中海の汚染による魚介類の大量斃死が起きている。地域・日本・世界のための緊急のテーマが目の前にあるという現実と、下水道公共工事電気計装設備の受注から上下水道制御・管理システム『やくも水神』は生まれ、発展してきた。

通信システムの大革命を受け、現在ではNTTドコモと提携、信頼性を飛躍的に高めiモード・DoPa網・インターネット技術を生かして全国展開の管理システムへと進化している。劇的な設備・管理コストの削減が実証され、すでに全国800カ所で採用されている。

さらには、富栄養化した水を資源としてとらえ、日本で初めて中断した国家プロジェクト「中海・本庄工区」の湖を生かし、96年に世界初超生命循環海洋牧場の構想を発表している。中海・宍道湖を栄養塩を貯える巨大水槽と考えれば、中国山地からの河川、日本海とつながる境水道は、新旧栄養塩を運んでくる無動力永久コンベヤー。この地方に古くから伝わる発酵文化と組み合わせ進化させれば、世界で最も緊急のテーマである食に関わる生命社会問題を解決するモデルプロジェクトとして立案できる。鳥インフルエンザの脅威が大きな社会問題となっている今、確かな第一歩が始まった、と理解している。

―「水」に関しては新しい動きもあるようですね。

小松　この地域の産・学だけでなく、武蔵工業大学の元講師稲葉宏哉先生をはじめ、国内外のたくさんの専門家の意見も聞き、「中海・宍道湖21世紀プロジェクト」を立ち上げた。水と共生していたはずの地域が、水に背を向けてきた現状を、正面から見据えようというものだ。

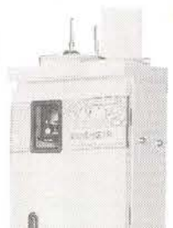
中海・宍道湖は日本を代表する汽水湖。富栄養化が進み、全国70％の生産高を誇った赤貝は全滅。名産のしじみ・しらうお・あまさぎの生息にも異変が起きている。水を力ずくで浄化するのではなく、湖底に堆積している汚泥の中の窒素、リンなどを珪藻類、動物性プランクトンの発生を促すことで資源化、生命の高連鎖をつくりだそうという構想だ。

太陽と風のエネルギーを有効に活用し、表流水と湖底水の流れを循環さ

（財）人間自然科学研究所

未来を拓く知価創造機関に

―ここまでの企業活動では自然環境がキーワードですが、これに国内外の社会環境も視点に置いて「健康」「平和」を加えた事業活動を標榜されています。

小松　これを私は企業から事業へ、と言っている。小松電機は私の生家の10坪の納屋を作業所に生業からスタートした。製品がヒットし受注が増え工場も大きくなって企業に成長した。〝生業〟とは家族や自分が生きるためにする労働。〝企業〟とは何かのために収益を目指す組織。その先にあるのが生涯をつらぬく目的共感集団〝事業〟。この事業とは生業や企業の繁栄はもとより社会のあらゆる立場の人たちの行動が、より望ましい社会に近づいていくような場と仕組みを生み出す仕事。第一歩は『環境・健康・平和の再定義』。いうまでもなくわが国は食料、

小松電機産業　社長　小松　昭夫氏